
黒の天使

sumita

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒の天使

【Nコード】

N9686L

【作者名】

sumita

【あらすじ】

人間、やっぱり最後に頼るのは自分です——というわけで、いけにえ寸前の自分を助けに行きましよう！ ってあんたらついてくんなああ・・・という、異世界？ラブ？ファンタジー？ な話。不定期投稿に耐えられる人だけ見よう。

序章

体がふわふわと空を漂っている。

これは夢なのだろうか。きっとそうに違いない。

なぜなら、私の体は私の真下にあるからだ。

（なんか、変な場所・・・）

そこはまるで世界史の資料集に載っている神殿のようで。

私は床にごろりと寝そべっている。

私の体は意識を失っているらしい。

そりゃ、意識があったらここに居る私は誰だって話になってしまうのだけれど。

きれいなプラチナブロンドの青年が私を覗き込んでいる。

顔は見えないけど、オーラは美形くさい。

（何してんの？ あ、抱えた）

それも米俵のように、遠慮なく肩に。

あんにゃろう。意識戻ったらどうにかしてやるっ。

そのまま青年は私の体を抱えて、神殿の奥へ。

私の見える範囲から消えてしまったのだ。

そして……。

(え? え? うとううそおつ)

青年は、真っ白いローブをケチャップ色にして神殿から出てきた。

ケチャップよりはちよつと、黒っぽいけど。

待て待て待て。

おんなじ色の液体の付いた剣をひと舐めして微笑むあんたに訊いてみたい。

それって、私の血ですか？

とりあえず目覚めよう

うそうそうそ！

これってどうしたらいいのかな。

神殿の中の私って、もしかしてかなりやばい状態！？

よし、とりあえず中に入ってみよう！ 救出しなくちゃ！

あれ？ でもこれって夢だよね？

・・・じゃあ、いいのかな？

とりあえず例の青年のほうに意識を向けると、ぱっちりあってしまった。

目が。

しかも何か凝視してるよ怖いよ！

こっち見て凄く驚いてるなあ・・・。

青年はすぐに神殿の中へ取って返し、そしてまたすぐに戻ってきた。
忙しい人だね、君も。

赤なのか青なのか判んない顔色だし。
体どっか悪いんじゃない？

予想通りの美形が勿体ないよ？

それにしても不思議な夢だね。

私は私を見ていて、夢の中のプラチナブロンド君とは目が合っちゃうし。

しかもプラチナブロンド君なんか、背中から真っ白い羽なんか出して、こっちへまっすぐ向ってきて・・・。

「くそっ失敗だ」

なになに？ 何を失敗したのかな？

お姉さんが相談に乗ってあげてもいいよ？

苦しゅうない、話してみよ。

「なぜ生贄の魂が、こんなところにいるんだ！」

・・・はい？

・・・もしかして、これって夢じゃない？

落下にご注意

(ちょ、そんなもの振り回さないでよっ)

プラチナ美形天使君は、あの血がべっとりとついた剣をこっちに向けてきた。

「こら逃げるなっ」

(逃げるに決まってんでしょ馬鹿——！)

そんなもの振り回して良いと思ってんの！？

銃刀法違反だからねあんたっ！！

……ここに銃刀法があればだけどさ。

「っ！」

グサツという音は聞こえなかったけど、確実に胸に感じた感触は、嫌なものだ。

「——！ し、しまっ……！」

ああ、手足が重くなっていきます。体も重くなっていきます。体は、どんどん速度を上げて、落ちていった。

私、死んじゃうの？
こんな若いのに？

そりゃ今までいい子だったとは言えないけれど、こんな死に方ってあんまりじゃない？

そもそもここはどこ？ あのパラチナブロンド天使は誰？

何で私、天使に殺されるの！？

上で天使君が何か叫んでいたが、私の耳には届かなかった。

地上に着くよりも先に、私は意識を失った。

お目覚め

——ああ、たまんない。

このふわふわさらさらぬつくぬくな・・・ベッド？

「っ」

ガバっという音がしたかどうかは分からないが、とにかくそのくらの勢いで体を起こした。

「い、生きてる」

手をぎゅっと握ったり開いたりして、私は感触を確かめた。

ああ、生きてる、生きてるよう。

あの天子君に刺されて落ちちゃった時は、本当に死んだんだと思ったけど。

なんで、生きてるんだろう・・・？

きよろきよろと辺りを見回すと、それはもう綺麗なお部屋だった。

派手すぎず、シンプルだけど品があって、けれど庶民の私でも居心地よく感じてしまう。

うーん。このセンスは素晴らしい。

しばらくベッドの上で待ってみたが、部屋に誰かが来る気配は皆無だ。

多分、ここに住んでる人が私を助けてくれたんだろうな。

そう思ったから、御礼が言いたいのに。

誰も、来ない。

・・・暇じゃないか。

よし、こうなったら自分で勝手にこの状況を把握しちやおう。

誰かが説明してくれるならそれに越したことはないけど、こうやって時間を持て余すというのも、勿体ない気がするしね。

それでは、脳内会議を始めたいと思います！

はい！ 議長、今日の議題をお願いします！

うむ。今日の議題は『ここはどこであるか』である！

はい議長！ さっきのプラチナブロンドは天使でした！ よってこ
こは天使の居る場所だと思われます！

うむ！ そういう訳でここは天国だと思う者、挙手！

はーい！！

全員一致！ よってここは『天国』である。これにて本日の会議終
了！

「い、いやだ——！！！！」

お目覚め（後書き）

こんな主人公で、ごめんなさい。

その担ぎ方はやめなさい（前書き）

お気に入り登録してくださった方、ありがとうございます

その担ぎ方はやめなさい

まずい。これはまずい。

そうだよ天使なんか居るんだから、ここはやっぱり天国？

……いつ死んだんだろ、わたし。覚えてないな……。

考えを廻らせていたそのとき、部屋中に響く大きな音がした。

そう、まるで、ドアを叩き破ったかのような。

そしてどこかと乱暴な足跡と共に現れたのは、天使のような男だった。

いや、正確には天使のような姿をした悪魔の形相をした男、だ。

男は息を切らせて、その人一人殺せそうな目を私に向けている。

……私、もしかしてやばい？

「——おいガキ」

「ひっ」

地の底から響くような声で話しかけられた。いや、重圧を掛けられた。

私、何もしてませんからね!?

気づいたらここに居たんですからね!?

「どうやって・・・いや、誰の差し金でここに來たのだ。直答を許す。答えよ」

何?　なんて言った?　直答を許す?

こいつ、何様だ!

その失礼な態度に腹が立って顔を背けたのがいけなかった。

「うきゃああああっ!!」

男は米俵のように、ひょいっと私を担ぎ上げた。いや、拘束した。

「吐かないと言うのなら、仕方あるまい、爪がなくなるくらいは覚悟してもらうぞ」

い。

「ヤダ――――！！！」

「っ、暴れるなっ」

「やだやだやだっお母さーん！」

「なら誰の差し金か言え！」

「知らないよっ起きたらそこに寝てたんだもん！」

「何？」

ピタリと動きを止めた男は私を肩から下ろし、食い入るように見つめ、私の背中に手を伸ばしてきた。

ちよ、今度はセクハラ!?

「やだっ」

「・・・・・・・・」

男はまだ私を見つめている。・・・・よだれの跡でもあるのだろうか。

「あとう、何か？」

「お、まえ・・・人間か？」

「そうだけど？ ああ、ここが天国だったのは知ってるよ？ いつの間にか死んでてびっくりしちゃったけど、地獄よりはいいかなあ？ あ、あのベッド貴方のだった？ なら怒るよねごめんなさい」

もう怒られるより先に謝っちゃえ。

そう思った末の発言は、再び男に火をつけてしまったらしい。

「いや——！」

私は男の肩に逆戻りしてしまった。

だからその担ぎ方はやめなさい

・・・もうダメ。

米俵式に担がれ揺さぶられ運ばれ、もう限界だ。

そうそう、背中に顔をくっつけるこの体勢になって気づいたんだけど、この人にも羽がある。

銀に近い白の、大きな翼。

この羽をむしりにとって羽毛布団にしたら気持ち良さそうだね。

それとね、髪の毛も長くて綺麗なの。

びっくりのし通しで気づかなかったけど、美形、だし。

この人も天使なんだろうな。

でも、天使ってみんな乱暴なんだ。意外と。

「……様？ 何をなさってるんです？」

ああ、ウィーン少年合唱団にいそうな綺麗な少年の声がするう。

今度の天使こそ、優しい人だと嬉しいな……。

「フェルマか。侵入者だ」

「へえ……珍しいですね。あれ、羽が無いですね」

もしかして、もいじゃったんですかー？ なんて、明るく言うなよ！

「いや」

ああ、やばい、意識が遠のきます。

これ、夢オチとかじゃあないよね？

現実はそのなに都合よくないって分かってるけど、ここは夢オチだと信じたい。

私が死んでるとか、天使に殺されそうだとか。

もうやだ。ほんとにやだよ。

「これは・・・人間らしい」

そうです、人間なんです。

「はあ？」

はあって、酷い言い草だね。人間ぐらい見たことあるでしょ？

ああ、でも私は天使なんて見たこと無かったな。

じゃあ天使からしてみれば人間も見たことの無い変な生き物かもね。

うん・・・そうに違いない。

そのまま私は天使たちの会話を聞くこともなく、意識を手放した。

だからその担ぎ方はやめなさい（後書き）

けっこうぐえっとなります。

まだヒロインの名前が出ていない。まずいなあ。

再会したくないナンバーワン

ゆーらゆらゆらゆーらゆら。

そんな効果音が付いてしまいそうな、気持ちのよい浮遊感の中で、目が覚めた。

開けた瞬間、再び閉じたい衝動に駆られたが、そこはぐっと耐える。

「あー・・・と、こんにちわ？」

「この状況で挨拶なんてできるんだ？」

はい、この青年、いや少年には見覚えがあるぞ。

私を米俵運びした記念すべき第一号であり、私を剣で刺した少年である。

会いたくないヤツ、ベストスリーにばっちり入っちゃってるんだけ

どね。

少年は私の体をじろじろ見つめた。何がそんなに気になるんではうか。

「あの・・・」

「ああ、何も喋るな。くそっ」

ぐしゃぐしゃに掻き毟られたプラチナの髪が、凄く可哀相なことになっている。

梳かして、三つ編みしたい。

「ねね、訊きたいんだけど、いいですか？」

「あ？」

「これって夢でしたーとかじゃあ、ないんだよね？」

「……」

「実はね、明日から期末テストなんだよね。休むと、かなーりまずいのね」

「……」

「夢なら早めに覚めたいんだけど」

「……人間てのは知能まで弱いのか」

哀れな、と本気で見つめないで下さい。

もうその反応で答えが分かっちゃったんですけど、まあそれは良しとしよう。

ていうか、何で私ここにいるんだ？

米俵二号はどうしたって言うんだ。

再会したくないナンバーワン（後書き）

米俵二号、わかりますよね？

愛称は〇〇〇ーちゃん

少年は可哀相な人を見るかのような目で私を見続けた後、こう切り出した。

ここは人の棲まぬ場所で、私はあるものを呼び出すためのいわば『生贄』として、世界の境界を超えて連れてこられたのだと。

切り出されたつもりがほとんど全て説明されてしまった。

でも理解はできた。この天使は説明能力がかなり高いと見える。

「じゃあ、死んだわけじゃないんだー」

「ああ、体はまだ生きてる」

「じゃあ返して」

「ダメだ」

・・・っち。

ていうか、私を生贄にしようとしてるヤツと、こんなにのんびり会話なんてしてていいものだろうか。

とっても良くないと思うけど、まあ状況把握のためには止むを得ないだろう。

「じゃあ天使君は・・・」

「ジェニルツアだ」

「じゃあジェニーは・・・」

「なぜ省略するんだ!」

だって長いんだもん。発音難しいんだもん。

ジェニーなら、英語の教科書に出てきたし、馴染みがあるんだよ?

アメリカからの留学生、みんなのアイドルジェニーちゃん。金髪とブルーアイズがチャームポイントです!

そういっただけならジェニーは真っ赤になって「女じゃない！」と叫びだした。

うん、分かってるけど。

君、女の私より百倍愛らしいお顔立ちですよ？

それにしてもこいつ、からかいがあるな。

天使からかって天罰を恐れるような私じゃありませんから！

1号君の野望

眉間に寄ったしわを揉み解しつつ、ジェニーは溜息をついた。

若いうちから溜息なんてつくもんじゃないよ？

幸せ逃げちゃうよ？

「で、ジェニーは何を呼び出したいの？」

そう問いかけると、ジェニーの肩がびくりと揺れた。

「お前には、関係ないだろう」

「でも私を生贄にするんでしょう？ 関係大ありじゃない」

「……了承してくれるのか」

「時と場合による」

これがもし、私の世界を救うための救世主を呼び出すとかなら、協力してあげてもいいかもしれない。

でも私利私欲の為にこういう事はしちゃいけません。

ジェニーは非常に悩んでいたが諦めたらしく、私をじっと見て、手なんか握っちゃって、懇願の体勢をとった。

「俺は・・・」

「うんうん」

「神を呼び出したい」

・・・はい？

「え？ 神、様？」

「そうだ」

神様なんて呼び出してどうするって言うの？ ジェニーちゃん。

てか、天使って神様に会えないんだ。

もっと気軽に会えちゃうのかと思ってたよ？

「神様呼び出して、どうするの？」

ジェニーはすつごく嬉しそうな顔をした。キラキラ光ってる。

うわあ、本当に美人で可愛いな、こいつ。

「今の神は俺が殺す。・・・そして俺がこの世界の新しい神となるんだ！」

・・・うわー、凄い私利私欲だー・・・。

2号君の搜索(前書き)

視点が変わりますよ

2号君の搜索

俺の肩に抱えていたはずの人間。

空想や女子供の好む御伽噺にしか出てこないような存在の人間。

その人間が『黒』をまとって聖域に現れたときは、俺は夢を見ていたのだと思った。

この神の見下ろされし国でもっとも高貴な黒を、だ。

「フェルマ、いたか」

「いいえ。搜索隊が草の根分けても見つけると言っていました」

無理でしょうね、というフェルマ。

あの高貴な色を纏った人間は、俺の肩に居たはずなのに忽然と消えてしまった。

まるで夢か幻だったかのように。

残ったのは、あれの柔らかい感触を覚えるこの肌と、表現しがたいあれの香りだけだ。

あの香りだけが、消えてしまった人間に繋がりそうな気がする。

表現しがたいあの香り。

俺には覚えがあった。

「大神殿はなんと答えた？」

あれは、この国で最も難しいと言われる神事を行う際に焚く、特別な香だ。

「そのような神事は行っていないし、行う予定もないと。ただ・・・」

「ただ？」

神殿は俺の管轄ではないが、この神事だけは放っておけない。

決して、あの人間の為などではない。

「二人、神官が行方不明中だと」

それだ。

2号君の搜索（後書き）

神事は儀式だと思って下さい。

む、ヒーローの名前が出て気やしない。

1号と2号（前書き）

視点要注意

1号と2号

えーっと、つまりあれだよね。

ジェニーは私を殺して、新しい神になる、と。

「君のことは忘れない」

いえいえいえ忘れて下さい！ できることなら今すぐにでも！
冷や汗がじつとりと背中を濡らした。

「君は今魂だけの存在・・・聖剣で貫いてしまったせいで触れることはできるけど、本当の体は別のところにある」

あ、やっぱり？

生身じゃないなって気はしてたんだよねー。

「体に戻ってもらうよ。・・・さよなら」

ちょ、展開速すぎるってば！

剣！ 剣近づけないでよおお！

ぎゅっと目を瞑って、これから訪れるだろう衝撃に備えた。

けれど、それはいつまで経っても訪れない。

あれえ・・・？

「消えた神官とはお前だったか、ジェニルツァ」

「――っ!？」

この声、聞いたことあるなあ。

あ、2号君だ。

「黒の・・・っ?! 何故ここにっ」

「我が宮殿に現れた愛し児を保護しに来たまでだ」

どうでもいいけど、もうちょっと分かりやすい言葉で話してくれな
いかな、この人たち。

「はっ・・・愛し児だと? 耄碌したかこの老いぼれ! それは

っ・・・」

「そうだ。召喚したのではない限り、これは愛し児に違いあるまい」

圧倒的な冷気が、ジェニーと私を襲った。
な、何ですか？

喧嘩は人様の迷惑にならないようやってほしいよ。

「黒の・・・貴様」

「ではジェニルツア、愛し児は我が黒の宮殿でお預かりする。会い
たければいつでも来るがいい」

それと、と2号君が私をチラ見した。
あ。何にも聞こえなくなっちゃった。

「そなたに預けたもの・・・丁重に保管されよ」

「・・・！」

はーい先生、聞こえませーん。

(うるさい娘だな)

ん？

突然聞こえだした声に戸惑っているうち、体はぼやけ、やがて何も見えなくなってしまった。

ジェニーが阿修羅像みたいな顔してるのが怖かったです。

黒の

2号君に抱えられて辿り着いたのは、あの綺麗な部屋だ。

「お前……とんでもないものに目を付けられたな」

すりすりと髪に鼻を押し当ててるな。

汗ばんでるから臭い嗅がないで！。

「はあ」

「名は？」

まっすぐな瞳に見つめられる。あ、この人の目、綺麗な若草色だ。

「咲」

「……サキ。私はリーディアル。この黒の宮殿を任された神官だ。これからお前をここで庇護する」

「わかった、リーダルさん」

「リーディアルだ」

「リーデアル」

「……リードと呼ぶがいい」

ふうん、ごめんね、うまく発音できなくて。

ええっとこの人神官？　って言ったっけ？

羽生えてるよね？　やっぱり天使だよね？

「リードさん、リードさんは天使？」

彼は腰に届くほど長い黒銀の髪を揺らして、私を抱えたまま、また歩き出した。

その背には銀に近い白の見事な翼。

「そうだ。ここは神に見守られし天使族の国だ」

ぽすんと降ろされたのはフカフカの長椅子だ。

おお、ロココ調ですか。いいご趣味ですね。

「わたし、やっぱり死んじゃった？」

そう言うときリードさんは首を振る、が重苦しい空気は払拭されない。

「ジェニルツアから経緯は聞いたのであろう」

「うん、生贄」

わたしなんかで神様を呼び出せるなら、たいした苦労じゃないよね
ー。

「……おいおい説明するが、今のお前は魂のみの不安定極ま
りない状態に違いない。死んではいないが、死に最も近い存在だ」

あー要するにお彼岸一歩手前？

分かりましたー大人しくしけば良いんですねー。

良いですよーたいした冒険心とかも持ってないのでー。

「この部屋は自由に使え。だが一人で出てはならぬ」

あいあいさー。

あ、何でそんなに不審そうにわたしを見てるの？

「……あとでフェルマをよこす。良い話し相手になるだろう」

そう言ってチラチラ振り返りながら出て行ったリードさんに一抹の心配を覚える。

心配性な人って将来禿げそう。

あの見事な髪が禿げるのか。

うーん。

黒の（後書き）

漆黒の翼↓銀に近い白の見事な翼に修正しました。
間違えて済みませんでした。

フェルマの溜息

人間。それは異世界のもの。物語の中のもの。我々とは違う生きものの。

それが今、僕の目の前で息をして、動いて、貪り食っている。

なんて悪夢なんだろうか。

ああ、神よ！

「フェルマさん、食べないの？」

「僕はさっき食べました。口許にパン屑がついてますよ。服にスプもこぼれてます」

「うん？ あ、ほんとだーありがとー」

「いえ・・・」

この人間は、どうやらジェニルツアが神を呼ぶために異世界から召喚されたらしい。

あの馬鹿めが。こんな間抜け面に我らが至高神がいらっしやるとでも思ったか。

こんな人間、リーディアル様に命じられなければ、誰が世話役になるものか。

「フェルマさん」

「はい、なんですか」

おまけに、この人間は神が愛する色である黒を体に持っているとき
た。

だから粗雑に扱ってはならぬと、リーディアル様は申されたが。

「あーん」

「………食事はもうとりました」

「あーん。美味しいから」

「………結構です」

「あーん、してくれないと、そこの窓から飛び降りちゃうよ」

「………っち」

仕方なく、口を開けると、不思議な味が口の中に広がった。
甘くとろける、それは美味と言える。

何だ、これは。

「それね、ポケットに入ってたの。チョコレートって言うんだよ」

「・・・はあ」

「おいしーでしょ。何でポケットに入ってたのか分かんないけど」

「貴方の世界の食べ物ですか」

「うん」

ふん。物で釣ろうとは、やはり人とは低脳な生き物なのだな。

「眉間にしわ寄ってるよ。ストレス溜まってるのは？」

「貴方には関係ありません」

「おかしーなーチョコには癒されない？」

「・・・」

「チョコレートには癒し効果があるはずなのになー」

・・・ふん。

食い物で癒されるはずないだろう。

「何故僕にそれをくれたんですか？　その、チョコレートを」

元の世界のものならば、きっと大切だろうに。
・・・気を使ったのか？ 人間が、僕に・・・。

「え？ 子供には甘いものでしょ？ あ、ちゃんと歯も磨いてね」

「僕は子供じゃない！」

これでも後百年で成人だ！

この日を皮切りに、僕の溜息と苦悩は増えていくのだった。

フェルマの溜息（後書き）

つながっぽい話なので、あんまりストーリーには関係ない、かも？

甘くとろけて (前書き)

閑話的なものです。

甘くろけて

最初に触れたときも思ったのだ。

人間とは、あのようにふわふわで柔らかいものなのかと。

「リードさん」

「何だ」

あの人間、咲を保護してから一週間が経つ。

咲は何不自由なく暮らせているようで、黒の宮殿を持つものとしては、ほっとしていた。

「あのう、私お仕事の邪魔ですよ？　そうですよね？　なのでそろそろ……」

「誰が邪魔だといった」

「でもー体勢的にデスクワークには向きませんよー？」

「構わん」

膝の上の咲は不満そうに視線をこちらに向けてくる。

黒曜石のようなそれに見つめられると、きっと誰もがこう思うだろう。

——餌付けしたい。

「咲様、お茶のおかわりはいかがですか？」

「あ、くださーい」

「リーディアル様もいかがですか？」

「今はいい・・・そうだ、昨日の焼き菓子はあるか？」

「はい、お持ちいたします」

咲がごくごくとお茶を飲む光景を堪能したメイドは、焼き菓子を取りに部屋から出て行った。

咲はメイド達にそれはもう可愛がられているのだ。なにしろ、物語にしか出てこない生き物だからな。

「咲、何か欲しいものは？」

「んー」

「失礼します、お菓子をお持ちしました」

「ご苦労」

持ってこさせた焼き菓子は、咲が昨日「くつきーだああ」とか言いながら喜んで頬張っていた物だ。

持ってきたメイドは下がるように命令すると、咲のほうを名残惜しそうにチラチラと見ながら退室した。

ふ、大方咲がお菓子を食べて、嬉しそうに顔を蕩けさせる様を見たかったのだろう。

させるものか。

「咲、ほら」

「え」

「あーん、というのだろう」

フェルマに聞いたのだ。咲の世界ではこうやって食べ物を与えるのだと。

「あの、一人で食べます・・・」

「あーんだ」

「・・・」

結局観念した咲が、大人しくクッキーを頬張る。少し、大きかった

らしい。

次はきちんと砕いてやらねば。

咀嚼し終えた咲が何とも言えぬ顔になっている。
それも可愛い。

「咲、あー・・・」

「思い出した！ 本返さなきゃ！ リードさんさよなら！」

「なにっ」

咲は早口でそれだけ言うと、あっという間に膝から飛び降り、部屋から出て行ってしまった。

隙を衝かれたか。しかも、ご丁寧に焼き菓子を少し持っていた。

咲が居なくなった膝を寂しく思いつつ、メイドに咲のお茶を下げさせ、残った焼き菓子を咲に与えるように命令した。

明日は、「どーなっ」とやらで釣ってみるか。

甘くとろけて（後書き）

咲はいつの間にかいろんな人を陥落させちゃいました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9686/>

黒の天使

2010年12月17日15時11分発行